復活の主日　聖書と典礼

■24年3月31日　第27回　み言葉の分かち合い

●第1朗読　使徒言行録10・34、37～43

復活節の第 1 主日は、使徒言行録が読まれ、復活された主に力づけられ、聖霊に導かれた初代教会を思い起こさせます。この箇所は、ペトロがローマ軍の百人隊長であるコルネリウスより招待を受け、「主なる神の霊がわたしの上にある。主がわたしに油を注がれたからである。」(イザヤ書61・1) このイエスについての証しです。

復活後のイエスを、最初に見たのは、食事を共にした弟子たちでした。

神は、イエスを生者と死者の審判者とし、イエスを信じる者の罪は赦され、永遠の命が与えられることを宣べ伝えるよう、弟子たちに力強く命じられました。

●第2朗読　1コリント5・6～8

パウロは、イエスの思いと異なる人との交わりを断つように命じる際、パン種（酵母・イースト）のたとえを用いました。パン種が良い意味としては、「天の国はパン種に似ている。女がそれを取って、三サトンの小麦粉の中に混ぜると、やがて全体が発酵する」(マタイ 13・33) 悪い意味では、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい」と仰せになった。(マルコ 8・15) ここでは悪い意味として用いられており、人に少しの悪意や邪悪が入り込むことで、全体が汚されると説いています。

過越祭には、古いパン種を捨て、新しいパン種として、純粋で真実を求めるよう説いています。キリスト教では過越祭の第一日目（除酵祭祭）が最後の晩餐の日であり、この日に、イエスを過越の子羊として捧げ、これを聖体拝領（聖餐式）します。

●福音書朗読　ヨハネ20・1～9

週の初めの朝早く、弟子たちより先にマグダラのマリアがイエスを葬った墓に行った理由。

① イエスに深い愛情と畏敬の念を抱いており、イエスの教えに対する信仰心が強かった。

② 女性たちが、葬儀やお墓の管理を担っており、このために訪れたと考えます。

墓の中にはイエスの遺体はなく、ペトロとヨハネに「主が墓から取り去られました。」とマリアが告げると、二人は墓まで走った。ペトロは墓の中に入りイエスの遺体がないことを確認したが、イエスが復活したことへの理解はまだしていなかった。

死生観を持つことで、これからの人生を歩もうとされる方々にとっては、とても大切になります。人が復活し神の国に入る際は、復活されたイエスに似た姿となります。

著者　蒲池　明憲